

大学におけるスキーの体育授業での受講生による授業評価

村本名史¹⁾ 菊本智之¹⁾ 瀧澤寛路²⁾

1) 心身マネジメント学科 2) 経営学部経営学科

Class Evaluation due to the Students in the Ski Class of the University

Morifumi MURAMOTO, Tomoyuki KIKUMOTO and Hiromitsu TAKIZAWA

要 旨

大学におけるスキーの体育授業を分析し評価することを目的とした。受講者を対象として、授業の内容、方法、および環境、授業の成果や満足度、授業担当教員の指導方法や態度に関する授業評価アンケートを実施し、その結果をバレーボールの体育授業と比較した。結果として、全ての設問においてバレーボールの値をスキーが上回り、このことから、スキーの授業は適切に運営されており、受講生による授業の満足度なども高く、授業担当教員の高い教育能力や資質も受講生によって認められていたことが示唆された。

キーワード：大学、スキー、授業評価

Abstract

The purpose of this study was to evaluate a university physical education ski class. We carried out the class evaluation questionnaires about contents, methods and environment, results and satisfaction of the class, the instruction methods and the attitude of the teachers, and compared the results with a physical education class of volleyball. The results of the evaluations of the ski class exceeded the results of the volleyball class in all questions. The students were highly satisfied with the professionalism and effectiveness of the instructor in charge of the ski class.

Keywords : university, ski class, class evaluation

1. 緒 言

平成8年7月に提出された第15期中央教育審議会第一次答申に基づいて、21世紀を展望したわが国の教育の在り方が検討され、学校週5日制に向けた新たな教育課程の編成が行われた。ここでの新しい教育理念は「生きる力の育成」であり、生きる力とは①自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、②自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性、③たくましく生きるための健康や体力、の3つであった（文部科学省、1996）。これらを鈴木（2002）は、①主体的な問題解決能力の育成、②豊かな人間性の育成、③健康・体力の育成、と簡潔にまとめた。これまで、定期的な野外活動が、「非依存」、「積極性」、「交友・協調」という指標を含む小中学生の「生きる力」の育成に影響を及ぼす可能性が示唆されている（比屋根と氏家、2009）。

一方、社会適応に関する野外教育の効果に関して、小田と坂本（2009）は不登校児がキャンプでの「仲間体験」や「自己の限界にせまる体験」を受けて、「友人関係の自信」や「自己の肯定的変化」といった「自己—他者への自信」を獲得したことを報告した。そこでは、キャンプから得た「自信」により「心の資源」を賦活させたこと、友人関係を中心とした「人・社会とのつながり」を持ったことが、不登校児の「適応をサポートする資源」となったと推察されており、不登校児はキャンプの体験から自信や関係性を回復し、それを適応へのサポート資源することによって、学校を中心とした社会へと適応していくと述べられていた。また向坊と城後（2006）は、自然体験学習が児童の自己表現力に及ぼす影響について考察しており、人とのよい関係を形成することに関わる「関係形成因子」および何らかの葛藤的な場面において相手に対して説得や交渉を行うことに関わる「説得交渉因子」によって構成される児童の自己表現力は、森の中でのプログラムを中心とした自然体験活動の継続的な実施によって育まれると述べている。

また、大学での野外教育に関して、長谷川（2000）は救急法や炊飯・調理を含む「野外実習」および水上安全法や手漕ぎ舟実習を含む「海洋実習」の内容等に関する評価を実施し、全体的には高い評価であったことを報告した。清水ら（2010）は、野外教育における集団活動を通して養成されるリーダーシップ及びフォロワーシップを専用に測定評価するための心理尺度を開発し、大学での野外教育活動におけるリーダーシップ及びフォロワーシップの変容について検討した。その結果、キャンプ実習という野外教育活動の授業は、コミュニケーションやソーシャルサポートを得る機会を増加させることにより、大学生のリーダーシップ及びフォロワーシップを養成する上で有効であることが示された。出口と堀（2010）は、

T大学の野外運動実習（キャンプ）の「総合評価」に影響を及ぼしている要因を明らかにすることを目的とし、「自己評価」と実習の周辺環境も考慮に入れた「実習運営評価」を取り入れた授業評価尺度を作成し、調査を実施した。その結果、「自己評価」では「積極性」と「主体性」の2因子が抽出され、「実習運営評価」では「実習環境」、「指導者」、「知識」、「人間関係」、「自然」の5因子が抽出された。「総合評価」との間に相関が認められたのは「実習運営評価」の「指導者」であったことから、今回の実習では指導者が熱意を持って望み、プログラム構成等に気を配ることが「総合評価」に影響していたとされた。さらに、大学のスクーバ・ダイビング実習において、参加者である学生による授業評価をアンケート形式で行った結果、97.2%の受講者が「まあ良かった」および「非常に良かった」と回答し、総合的評価は非常に高かったことが報告されている（千足ら、2000）。二瓶ら（2008）によると、大学で実施されたマリン実習の評価について、期待度も満足度も高かったが、「テキスト」、「講義の内容」、「ガイドブック」の改善が今度の課題として挙げられていた。近年、大学経営は少子化により志願者、入学者、学生数の確保が熾烈を極めており、魅力ある授業を学生に提供することが、選ばれる大学になる条件の一つであると考えられていることから、授業評価は適切に行われていくべきであり、それを基に授業を改善していく必要があるとも述べられていた。

野外教育におけるプログラムの評価手法に関して、他者から受けるフィードバックとして、①参加者から受けるフィードバック、②クライアントから受けるフィードバック、③同僚から受けるフィードバックが挙げられている（川嶋、1999）。この中では①参加者から受けるフィードバックでは、「参加者は基本的に指導者から嫌われたくない」「厳しい指摘を受け入れてくれる関係性が両者の間でできているか不安」などの理由から、必ずしも適切なフィードバックにならない可能性もあることが指摘されている。大学での野外教育活動では実施する季節を問わず、受講生である学生へ魅力的な授業を提供することが求められており、そのためには指導者へのフィードバックとして実施される授業評価は受講者個人が特定されること無く、厳しい指摘であっても授業を改善するためだと結果を受け入れ、積極的に授業評価を実施する必要がある。

そこで本研究は、自然環境の厳しい冬季に大学で実施されている野外体育授業において、授業の内容、方法、および環境、受講生の授業を受けた成果や満足度、授業担当教員の指導方法や態度を分析し評価することを目的とした。

2. 方 法

2.1 対 象

2017 年度に T 大学において実施された、中学校および高等学校教諭免許状（保健体育）の取得を目指す学生（以下、体育学生）を対象としたスキースキーの体育授業および一般学生を対象としたスキースキーの体育授業において、受講生 33 名を対象として授業評価アンケートを実施した。受講生にはアンケート実施の目的を含めた研究に関する説明を実施し、データ提供に関する同意を得た。

2.2 スキースキーの体育授業

シラバスの内容に従って、体育学生を対象とした授業では「自然との関わりの深いスキースキーを通して、その運動特性を理解しながら、その知識と技能を習得し、自然の中で得られる教育的な効果や人間関係などについて学んでいく。また、教員に必要とされる資質、ならびに自然環境の中で教育を行う上で身につけるべき適切な行動様式なども併せて修得する。」という内容を、一般学生を対象とした授業では「身体に関する基礎知識、基礎体力、基礎技術の総合実践を行う。スポーツの文化的価値とその理解を深め、健康や体力の保持・増進の観点から、継続的な運動実践の重要性を認識する。冬の屋外スポーツとして、また生涯スポーツとして幅広い年齢層に支持されているスキースキーを種目として設定し、日常生活から隔離された冬山という自然環境の中で、じっくりと集中的に基盤を構築していくことを目標とする。」という内容を実施した。

2.3 授業アンケート

T 大学において実施された授業アンケートを参考として、関心の持てる授業内容であったか、教員の話方や説明は理解しやすかったか、授業の進み方やペースは適切であったか、学生の学習意欲や授業参加を促す工夫は

されていたか、授業に対する教員の熱意が感じられたか、授業に集中できる環境をつくるために適切に対応していたか、授業内容を自分の知識とすることができたか、授業を受けて満足したか、自由記述などから構成される 15 の質問を設定した。なおアンケートは回答した個人が特定できないように無記名式で実施し、回答は 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない、という 5 段階で設問に対する評価を行った。野外で実施されたスキースキーの授業アンケート結果と比較するため、室内のスポーツ種目であるバレーボールについて、スキースキーの授業担当者でもあった教員が 2017 年に担当した授業のアンケート結果（村本ら 2018）を比較対象として用いた。

2.4 統 計

スキースキーの授業アンケート結果を体育学生と一般学生と比較すると共に、スキースキー授業の全受講者（体育学生と一般学生）の結果とバレーボール（36 名）の結果も比較した。なお、等分散を仮定しない Welch's t test を用いて検定を実施し、有意水準は 5%とした。

3. 結 果

3.1 授業アンケート

体育学生 23 名と一般学生 10 名からアンケートを回収し、回収率は 97.1%であった。授業アンケートの設問および回答、体育学生と一般学生を合わせた結果（平均±標準偏差を含む）を図 1 から図 8 に示した。また、体育学生と一般学生の結果を比較した結果、両群に有意差は認められなかった（表 1）。また、スキースキー全体とバレーボールを比較した結果を図 9 から図 16 に示した。全ての設問において、スキースキーがバレーボールの値に比べて有意に大きかった。

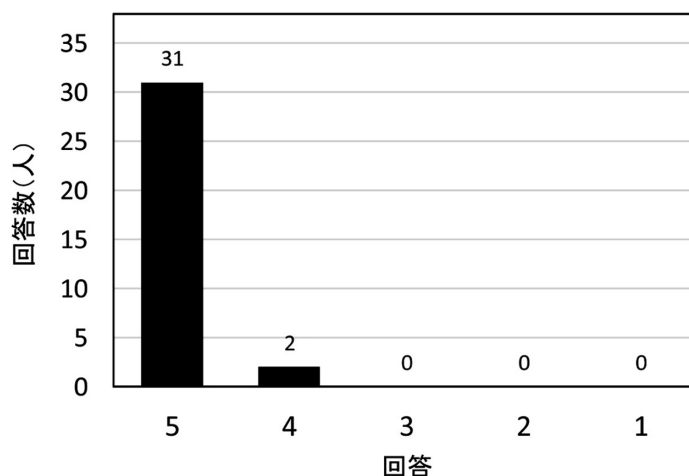


図 1 関心の持てる授業内容でしたか？

（回答）5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない
（平均±標準偏差）4.94 ± 0.24

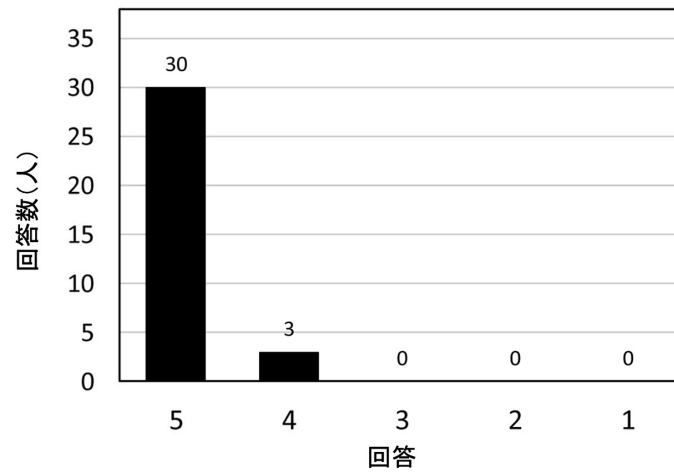


図2 教員の話し方や説明は理解しやすかったですか？

(回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない
(平均±標準偏差) 4.91 ± 0.29

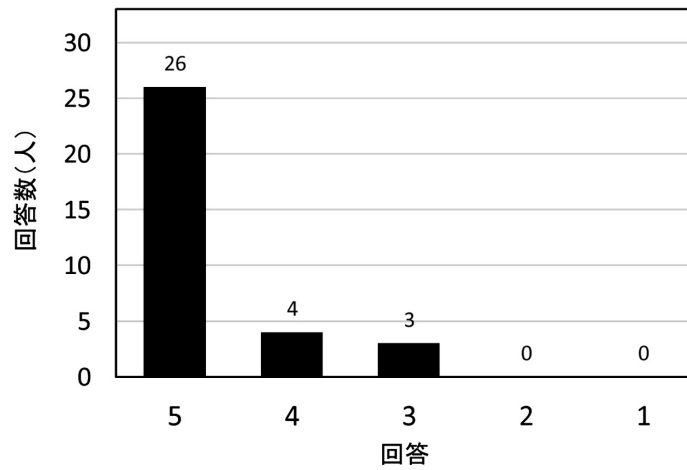


図3 授業の進み方やペースは適切でしたか？

(回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない
(平均±標準偏差) 4.70 ± 0.64

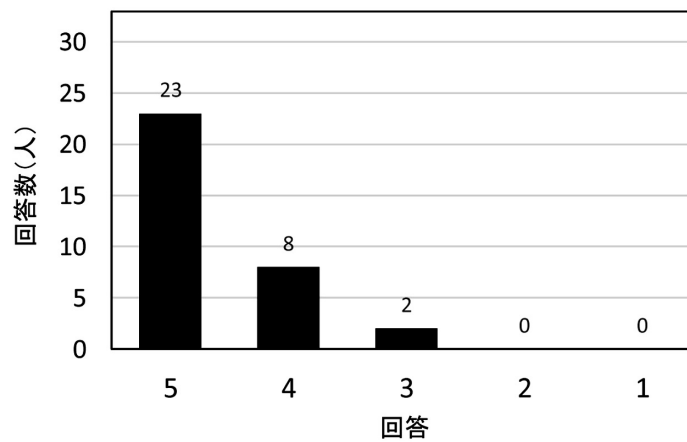


図4 学生の学習意欲や授業参加（発言、発表、話し合いなど）を促す工夫はされていましたか？

(回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない
(平均±標準偏差) 4.64 ± 0.60

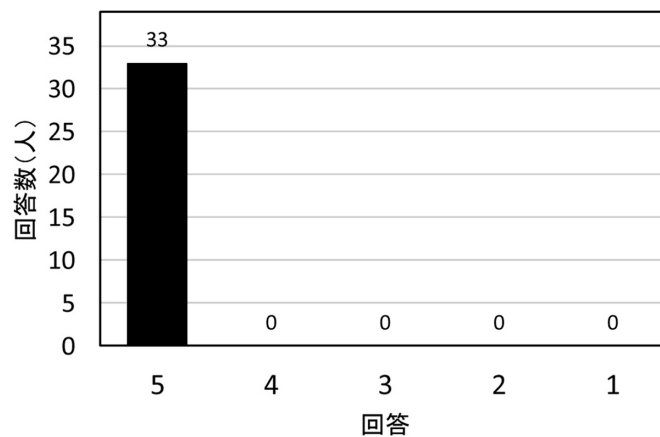


図5 授業に対する教員の熱意が感じられましたか？

(回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない
(平均±標準偏差) 5.00 ± 0.00

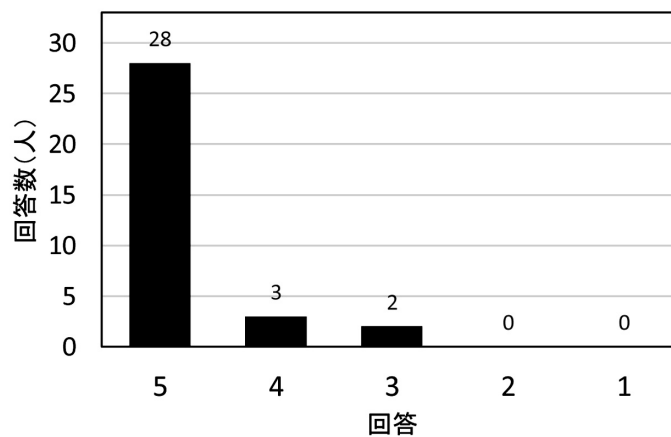


図6 教員は私語を注意するなど、受講者が授業に集中できる環境をつくるために適切に対応していましたか？

(回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない
(平均±標準偏差) 4.79 ± 0.55

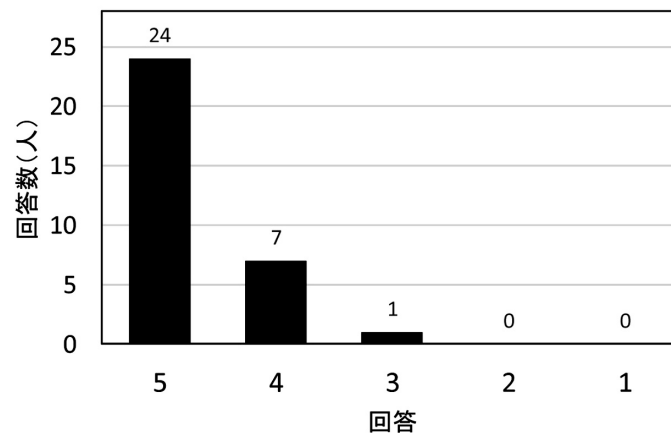


図7 この授業の内容を自分の知識とすること（良く理解）ができましたか？

(回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない
(平均±標準偏差) 4.72 ± 0.52

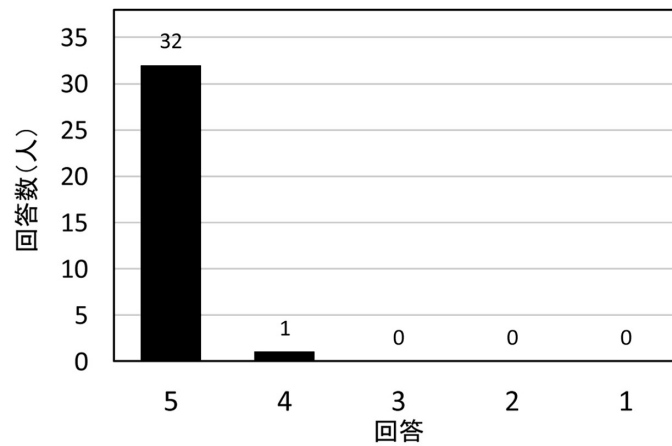


図8 総合的にこの授業を受けて満足しましたか？

(回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない
(平均±標準偏差) 4.97 ± 0.17

表1 体育学生と一般学生における授業アンケート結果の比較 (平均±標準偏差)

	関心の持てる授業内容でしたか？	教員の話し方や説明は理解しやすかったですか？	授業の進み方やペースは適切でしたか？	学習意欲や授業参加を促す工夫はされていましたか？	授業に対する教員の熱意が感じられましたか？	教員は授業に集中できる環境をつくるために適切に対応していましたか？	授業の内容を自分の知識とすることができましたか？	総合的にこの授業を受けて満足しましたか？
体育学生	4.96±0.21	4.91±0.29	4.87±0.34	4.78±0.42	5.00±0.00	4.87±0.34	4.82±0.39	5.00±0.00
一般学生	4.90±0.32	4.90±0.32	4.30±0.95	4.30±0.82	5.00±0.00	4.60±0.84	4.50±0.71	4.90±0.32

n. s.

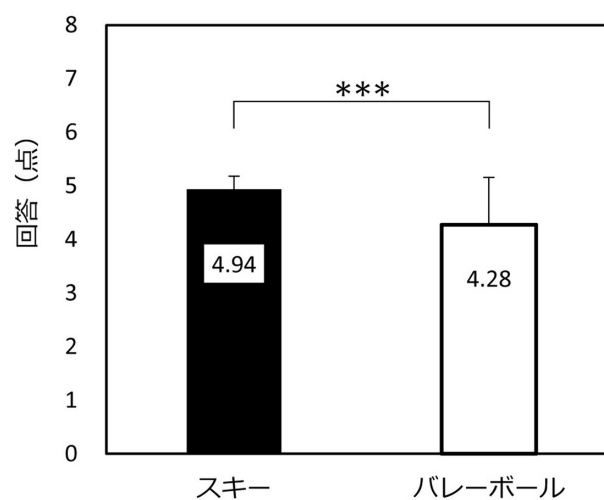


図9 関心の持てる授業内容でしたか？ (平均と標準偏差、***: $p < 0.001$)

(回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない

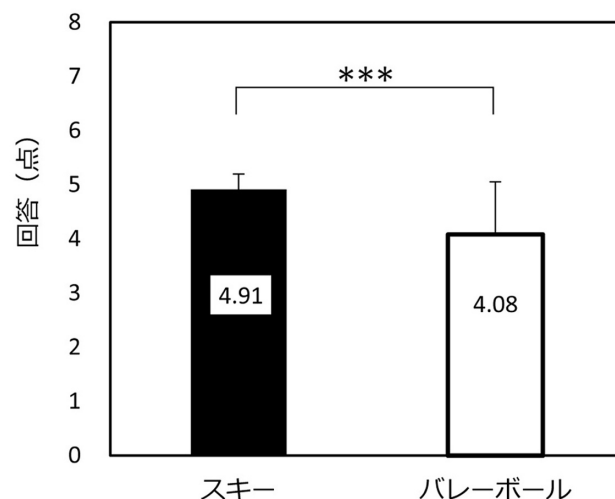


図 10 教員の話し方や説明は理解しやすかったですか？（平均と標準偏差、***: $p < 0.001$ ）
 (回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない

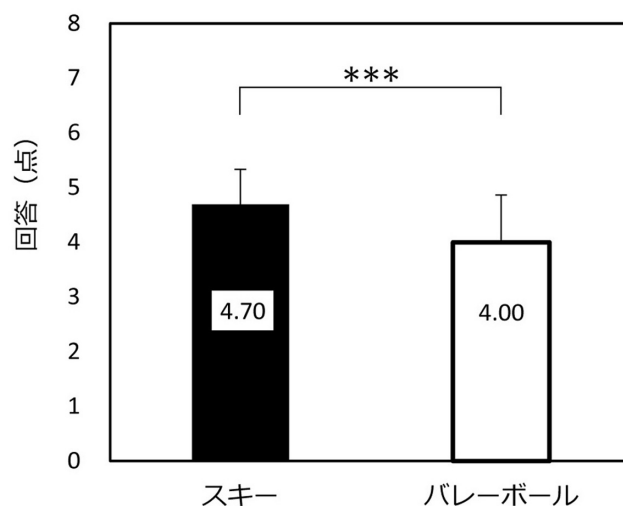


図 11 授業の進み方やペースは適切でしたか？（平均と標準偏差、***: $p < 0.001$ ）
 (回答) 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない

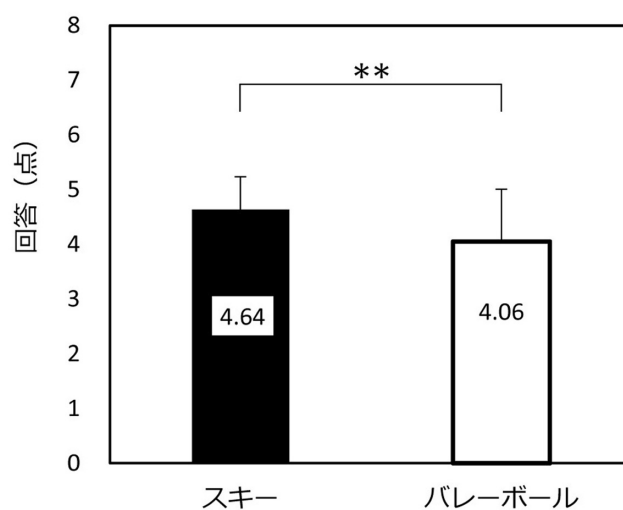


図 12 学生の学習意欲や授業参加（発言、発表、話し合いなど）を促す工夫はされていましたか？
 (平均と標準偏差、*: $p < 0.01$)
 5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない

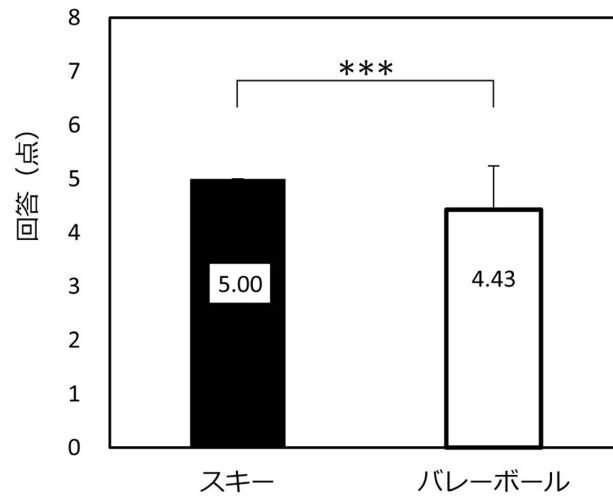


図 13 授業に対する教員の熱意が感じられましたか？（平均と標準偏差、***: $p < 0.001$ ）
 （回答）5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない

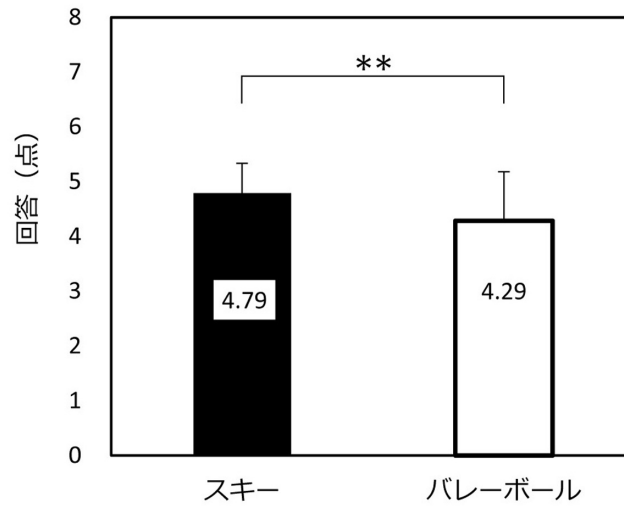


図 14 教員は私語を注意するなど、受講者が授業に集中できる環境をつくるために適切に対応していましたか？
 （平均と標準偏差、*: $p < 0.01$ ）
 （回答）5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない

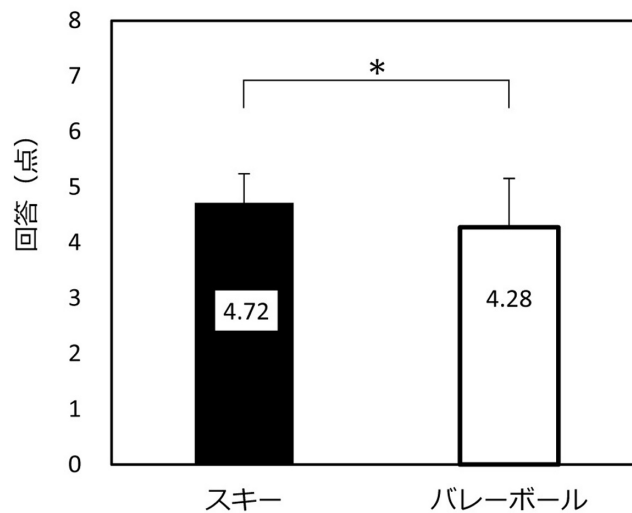


図 15 この授業の内容を自分の知識とすること（良く理解）ができましたか？（平均と標準偏差、*: $p < 0.05$ ）
 （回答）5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない

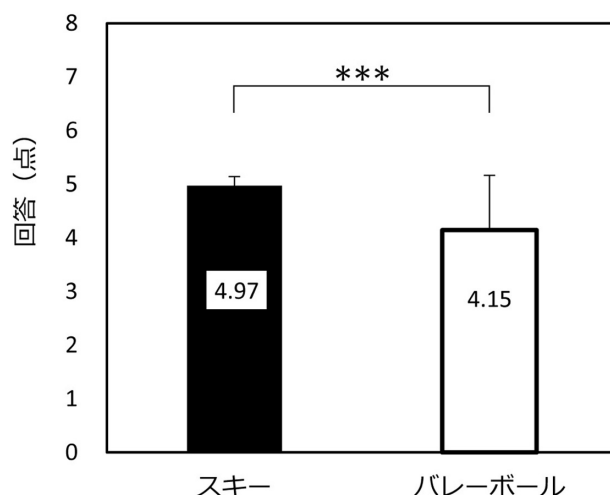


図 16 総合的にこの授業を受けて満足しましたか？（平均と標準偏差、***: $p < 0.001$ ）

（回答）5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わない

4. 考 察

4.1 授業アンケート

スキーの授業を受講した体育学生と一般学生の授業アンケート結果を比較したところ、両群に有意差は認められなかった（表 1）。しかし、スキーの受講者全体とバレーボールでの授業アンケート結果を比較した結果、全ての設問において、スキーがバレーボールの値に比べて有意に大きかった。バレーボールの授業アンケート結果は、全ての設問においてバレーボール授業を実施した H キャンパス全体平均の値と同等かそれ以上の値であったが、スキーはこのバレーボールの結果を全ての設問において上回ったことは注目すべき点であると思われる。授業アンケートの設問について、関心の持てる授業内容であったか、授業の進み方やペースは適切であったか、学生の学習意欲や授業参加を促す工夫はされていたか、授業に集中できる環境をつくるために適切に対応していたか、といった授業の内容、方法、および環境に対する質問だけではなく、授業内容を自分の知識とすることができたか、授業を受けて満足したか、という授業の成果や満足度に関する質問においても室内種目のバレーボールを有意に上回った（図 9～16）ことは、野外教育科目であるスキーの授業が適切に運営されており、受講生によってスキー授業が高く評価されていたと推察できる。また、教員の話し方や説明は理解しやすかったか、授業に対する教員の熱意が感じられたか、という授業担当教員の指導方法や態度に関する質問においても高い評価を得ることができたことは、担当教員の高い教育能力や資質が受講生によって認められたと考えられる。

多田（1998）は、短大生を対象とした冬季野外活動実習（雪上キャンプおよびスキー）における授業評価を実施し、体育実技と比較・検討した。その結果、雪上キャンプ実習では、新しい友達を得るという評価が高く、スキー実習では技術の習得における評価が高く、両実習ともに評価が高かったのは、親睦を深める及びストレスの

発散であった。

我々はこれまで、日本各地における野外教育の実施状況を調査し（国広ら 2010、村本ら 2011a）、学生が総合支援学校と連携して実施した離島における海浜実習、カヌー体験、スキー指導者研修会、自然学校スキー教室、障害者手帳を所持する者を対象とした雪遊び&スキーツアーについて内容を報告した（国広ら 2011、村本ら 2011b）。中でも山と海といった自然環境に恵まれた山口県における野外教育の計画・実施状況を詳細に調査した結果、運営をサポートした大学生や野外教育活動への参加者から多くの肯定的な意見を得てきた。T 大学の位置する静岡県は、一年を通じて温暖な気候で知られ、北には富士山麓、東には伊豆半島といった海洋性・山岳性の野外活動の実施には、絶好のロケーションにあるといえる（瀧澤、1994）。このような野外活動の実施に適した地域特性を利用して、将来子どもの「生きる力」を育成し、様々な状況に対応できる指導者を育成することは、教員養成を実施する学科に与えられた責務だと考える。

5. 結 論

本研究では、自然環境の厳しい冬季に大学で実施されている野外体育授業であるスキーにおいて、授業の内容、方法、および環境、授業の成果や満足度、授業担当教員の指導方法や態度に関する授業アンケート実施し、その結果を分析し評価した。その結果、授業アンケートの全ての設問において高い評価であった。このことから、スキーの授業は適切に運営されており、受講生による授業の満足度なども高く、授業担当教員の高い教育能力や資質も受講生によって認められていたことが示唆された。T 大学が位置する静岡県が自然環境に恵まれている地域特性を考慮すれば、T 大学における野外教育活動のさらなる発展が期待できる。

文 献

- 千足耕一ほか（2000）スクーバ・ダイビング実習（専門野外教育Ⅰ）における学生による授業評価. 国土館大学体育研究所報、18:103-111.
- 出口順子、堀 佳子（2010）野外運動実習（キャンプ）参加者の授業評価に関する研究. 東海学園大学研究紀要、15:109-123.
- 長谷川勝俊（2000）大学体育における野外・海洋実習の実践報告—履修意識調査と体験評価より—. 野外教育研究、4 (1):65-70.
- 比屋根 哲、氏家彰子（2009）定期的な野外活動が子ども「生きる力」に及ぼす影響. 野外教育研究、13 (1):63-30.
- 川嶋 直（1999）プログラムの評価手法. 野外教育指導者読本:98-99.
- 国広勝代ほか（2010）山口県、島根県および中部地区における野外教育の実施状況. マシヤマ印刷.
- 国広勝代ほか（2011）山口県の自然を生かした野外教育プログラムの開発. マシヤマ印刷.
- 向坊 俊、城後 豊（2006）自然体験学習が児童の自己表現力に及ぼす影響—体験型環境教育プログラムに着目して—. 野外教育研究、10 (1):35-47.
- 村本名史ほか（2011a）山口県萩市、長門市および阿武町における野外教育の計画・実施状況. 山口福祉文化大学研究紀要、4:109-114.
- 村本名史ほか（2011b）総合支援学校と連携した離島における海浜実習. 山口福祉文化大学研究紀要、4:185-190.
- 村本名史ほか（2018）大学における体育実技（バレーボール）の反転授業および IT 活用の実践. 常葉大学健康プロデュース学部雑誌、12 (1):81-93.
- 文部科学省（1996）第 15 期中央教育審議会 第一次答申 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について—子供に「生きる力」と「ゆとり」を—. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309638.htm
- 二瓶雄樹ほか（2008）野外活動実習の評価とその履修動機に関する一考察—2007 年度マリン実習からのデータを基礎に—. 中京大学体育学論叢、49 (2):33-43.
- 多田 聡（1998）冬季野外活動実習における授業評価と指導者の社会的勢力. 野外教育研究、2-1:21-29.
- 瀧澤寛路（1994）生涯スポーツにつなぐ野外実習テキスト—カヌー編—. 黒船出版、p.4.
- 小田 梓、坂本昭裕（2009）不登校児は長期冒険キャンプ後どのように社会へ適応していくのか. 野外教育研究、13 (1):29-42.
- 清水安夫ほか（2010）大学体育における野外教育活動の可能性の検討—プロジェクトアドベンチャー・プログラムを導入したキャンプ活動におけるリーダーシップ及びフォローシップの養成—. 大学体育学、7:25-39.
- 鈴木和弘（2002）「生きる力」を育成する保健体育. 健学社.